

主 論 文 要 旨

1 9 7 2

清 忠 臣

## 馬の伝染性貧血の臨床診断法に関する研究

1904年に、かの有名なCARRE et VALLEE によって、馬の伝染性貧血（伝貧）は、ウイルスに起因するということが発表されて以来、先人が各方面から、これが究明に絶大な努力を傾注してきたが予期に反してその実績は、あまり表われずに終戦となった次第である。

戦後も農林省関係その他の研究者によって、絶え間ない探究の結果、電子顕微鏡下における病原体の観察報告あるいは、伝貧ウイルスが馬の白血球内で増殖でき、これを抗原とした血清反応が可能となるなど、ここ10年来画期的な成果が報告されている。しかし、このように逐次解明されているけれども未だ未解決の点が多い。特に適確な診断、治療、予防については確立されていない現況である。

私は、幼駒7頭に伝貧ウイルスを接種して慢性伝貧を作り、接種前の調査事項を対照とし、一般臨床、血液所見、心電図学的所見、血圧所見などについて精査検討したところ、慢性伝貧診断の一助たりうる成果を得たと思われるので報告する。

### 1) 一般臨床所見

ウイルス接種後、約12日前後の潜伏期間を経て発病し、1号馬は急性、2号馬以下の6頭は慢性経過をとった。慢性型の6実験馬には、何れも回帰熱が認められ、この体温曲線中に日差の逆転がしばしば観察された。

逆転体温については過去の文献などにも診断上の重要性は述べられているが、これを深く追及したところ、次のようなことが判明した。すなわち、逆転体温なるものの姿は、接種後の方が出現が多く、接種前に比較して、ほぼ「2:3」であった。そして接種後の逆転体温の日差は大であり、逆転体温の平均値（算術）

は、前日の平均値より小さい。これは「温度的位置づけ」といえる。また逆転体温は、熱発作の下降期より出現し、その直後にわたり連続的に観察される（大山附随型）。

更に平常温中にみられる暫時熱の直後に孤立した逆転体温が認められる（小山附随型）。

この両者は、回帰熱を呈する場合には、交互に出現して一種の韻律を形成している。

すなわち、前述の温度的位置づけに対し、これは「形態的位置づけ」といいうる。

因みに、この逆転体温は、結核病においてしばしば所見されるものといわれているが、本邦においては、馬の該病に関する報告は見当たらないので、伝貧特有のものとして扱っても大過なきものと思われる。

呼吸数においては、特筆すべき変化は、みられなかったが、脈搏数では、平常温となっても、やや増数している傾向がうかがえた。

## 2) 血液所見

赤血球数は、総体的に減少を示しているが、可成の時点において成績は、区々であり一概に論じ難いことも多かった。

白血球数は、接種後一時的に増加を示したが、経時的には減少をみた。白血球像の所見では、比較的単球の増加を、リンパ球と好中球については、接種後もリンパ球の方が好中球に比べて相対値は、大のまま推移し、絶対値の変化もまた、おおむねこの比率を保持していた。

結膜の所見においては、貧血や黄疽が発現し、680万の赤血球数で帯黄蒼白色、540万では不潔帯黄淡紅色あるいは、蒼白のものもあった。

ヘモグロビン、ヘマトクリット値も接種後は著しい減少が認められた。

### 3) 心電図学的所見

R-R、P-P、P-Q、Q-T interval の変化は、個体差および計測時点などにより一定の線は決し難く、その程度もまた僅少であった。

P波は、おおむね延長と振幅の減少を認め、一部のものに、二頭形の変化がみられたに過ぎない。

QRS群のdurationは、多少の延長がみられ、低振幅のrS型を呈している。

T波では、durationの変化に乏しいが、接種後、逆転あるいは二相性などに变化している。

ST部においては、durationの変化に乏しいが、2号馬を除き上昇が認められたことは、注目される所見である。

### 4) 血圧所見

接種後は、予期した如く経時的に降下し、100 mmHg以下を記録した。

以上の接種伝貧の試験結果よりみて、慢性伝貧の臨床所見であると一概に論じられないが、特に次の3項は、診断上有力な因子として、意義があるものと考えられる。

(a) 逆転体温の温度的、形態的の位置づけが見出され、多発および日差数値の増加が観察された。

(b) 白血球像中、単球の増加が所見された。また、好中球よりもリンパ球の相対値が高いまま(健康幼駒の状態)推移していることは、診断対象が幼駒の場合には、留意すべきである。

(c) 心電図所見上、急性型（1号馬）では、概して起電力の増加が、その他の慢性型においては、減少がみられた一方、ST部の上昇は、全般的に目立った存在であった。